

## 速水御舟旧画室、速水家所蔵美術作品資料問題についての現状

茅ヶ崎市美術館長 小川稔

2017年11月8日

目下、速水家とのやり取りは長男速水健人さん、長女しのさんを当事者として茅ヶ崎の文化景観を育む会代表山口洋一郎さん、小川との間でおこなっている。速水夏彦さんは自宅療養中ということで電話である程度の会話は可能であるが直接話し合いに参加されることがない状態が続いている。今問題となっている御舟画室、所蔵される美術品の今後の対応については長男、長女がまかされているように思われる。

10月15日、茅ヶ崎館で市民にこの問題を喚起するための「考える会」を催したが、建築物の寄贈についての市の現状の考え方（解体移築が資金面で困難であること）を速水家に伝え、さらに保存に向けて別の方策を速水家の協力により探っていくという方向性を確認した。

また画室問題と一応切り離し、速水家の所蔵する御舟の作品資料、ならびに吉田耕三氏の近代陶磁器を中心とする美術品コレクションを現状のままに置くことにセキュリティ上問題があること、早急の対策が必要であることを確認した。そこで従来提案していることだが茅ヶ崎市美術館への寄贈、あるいは一部市による購入という選択肢があることを速水家側に伝えた。さらにその判断に至るまでとりあえず一括美術館へ寄託したらどうかとの提案をしたがそれに対しその日の内に返事があり、家族会議の結果、美術館の協力を求め作品資料を寄託したいとの申し出があった。

速水御舟関係の作品資料や同家所蔵美術品の実態はまだ不明の点が多く、慎重に進めなければならない面がある。自宅に保管されているものの中に御舟自筆の日記、作品目録、手紙、写真などが含まれているならば第一級の資料的価値があり、茅ヶ崎市美術館に寄託されることで全国からの関心が寄せられることになるだろう。合わせて千葉県茂原市などに分散し預けられている夏彦氏所蔵の御舟作品の寄託先を茅ヶ崎市美術館に集中することができれば現在日本画家として最も人気のある速水御舟については東京山種美術館につぐゆかりの美術館とみなされることも期待される。

吉田耕三氏コレクションの全体像も不明だがその中に北大路魯山人、川喜田半泥子など昭和期の代表的陶芸家の未紹介の代表作が含まれているならば茅ヶ崎市美術館で公開されることで同様に大きな話題をよぶことになるだろう。

しかし、あくまでも将来これら作品資料全体が茅ヶ崎市の所蔵となることが望ましく、茅ヶ崎市美術館への寄託が一時的な保管先とみなされることであればならないと考えている。この点についての速水家の意思を相互で確認する必要があるだろう。

これらの作品資料を現状の家屋から救出することが当面の課題で専門家の手によることが望ましいが寄託が決定する前の段階で本来速水家でおこなわれるべきリスト作りに茅ヶ崎市美術館学芸員が参加できるかどうかについても考えなければならない。

懸案の御舟画室保存についても先日の勉強会の後、大正15年11月、御舟の義父吉田弥一郎の目黒別邸敷地内の画室を含む複数の建物で最初の個展が開催されたこと、画室で重文の《炎舞》が展示されたことなどが見取り図などにより確認された。現在茅ヶ崎にはこの時会場となった「画室」と旧今村紫紅画室「泉石軒」が移築されている。御舟画室だけでなくこの泉石軒の文化史的価値についても今後検証し二棟合わせた保存に向けた発想、運動が必要であるように思われる。

以上、建築物保存と美術品の扱いは当面別々に対応を考えなければならないのだが本来別のものではなくひとつの話題として認識されることでより価値が認識され、市内外の広範な関心事となることが望まれる。